

昭和二十七年

恍として日輪冬の瀬を渡る

風花や唳々とひく獅子の笛

突き崩す楳の年輪雪降り

饒舌の婦が去る軒の雪しづる

娶る人逃く人峡の冬深し

観相の灯も如月のうるほいに

梅かほり軍鶏夕光（カゲ）を曳き歩む

雪積む木音をひそめて暮れ急ぐ

荒神の注連シメなおしろき追儼の爐

風荒ぶ山に聴きとむ彼岸鐘

水温み健康に夜々寝溺るる

燕来る機織る母が老いゆく櫛

蛇笏師は雪隠でよく読書をされるとか
師に倣う古き雪隠竹の秋

野は花菜不具の娘縁を得て去れる

野外蚕に明けの月光霜のごと

郭公や桑刈られ野路あからさま

長男泰元

バラの卓子子も少年期クオレ読む

上簇の灯を煌々と風冷ゆる

桑刈られドツと麦秋農婦の葬

つばめカヘ孵る土間の蚕やぐら盛食期

御嶽吉沢のK尼新家一泊、

後恋に生きたと聞く美しい尼弟子

尼弟子の指の哀艶蜜柑むく

冬磧葬列照られ遠ざかる

耕衣つけし盥に喜雨の侏儒おどる

厨裏棲み古り母と親し墓

秋となる夜気そくくと水盗む

泰元の遠足について八月富士見高原に遊ぶ

日野敏子碑

尾の花かげ眞実囁く敏子の碑

行く夏の雨がすすろに萋咲けり

田水涸れ新月青き夕焼中

忌の簾きびしく静かなる残暑

泰元受持 田中先生の病氣見舞正楽寺へ 二句

草を干す秋暑静かに山館

虫干しの衣美しく乙女病む

或る童子の死を悼む二句

奥津城の露に褪せゆくわらべ碗

露万斛之^{シタベ}使負いゆかむ

憶良の歌に寄せる

端居すや来し方星に似てはるか

有明の冴ゆる金環秋蚕飼う

新家 おとり様逝く二句

夜葬りの火に露光る曼珠沙華

秋梅雨^{ツユ}の霽^ハれ間の星や柩出す

地球儀の海の半球秋灯澄む

夕陽燃ゆ^{ハザマ}峽の白膠木^{ヌルデ}おくて刈り

享けこぼす麦蒔き^ホ祝ぎの酒熱く

冬に入る桑の葉もろき帰省道

風呂熱く稻架をかわかす風つのもる

夜もたぎる味噌豆の釜ちゝる老ゆ

うなう影たちまち長し冬至暮る

ねむる山襷に沈みて人棲む灯

近隣の計をつぎぐに年暮る、

冬深しみな低く点く農家の灯

山の娘群るゝ廉賣台も年つまる

かえり花水翳^カいつか冷え深く